

**ママは僕の  
ヌードデッサンモデル  
描き終わった後は  
ママのカラダを  
僕の肉筆で！！**

ママは僕のヌードデッサンモデル  
描き終えた後はママのカラダを僕の肉筆で！！

僕の名前はマユト。

僕は実家でママと二人暮らし。

僕は絵を描くことが大好きだ。

まだ世に名を轟かすような有名な画家とは全然言えないけれど、美術学校に通っていてコンクールにいくつも入選、更には路上で絵を販売したり似顔絵屋をやったりしてもう5年くらいになる。

立派な画家になることが目標で、頑張っているんだ。

そんな僕は、この家では “世界一の画家” でいられる。

なぜなら、“世界で一番美しい絵” を描けるからだ。

その対象となるモデルはママのカラダ。

ママにはヌードモデルになってもらっているんだ。

昔からママとはとても仲が良くて、単なる母と息子という枠組みを超え、まるで友人同士のような感じだった。

それだけに、ママにヌードモデルになってくれと誘うのは確かにそれなりに勇気のあることではあったけど、まだ気軽だったと思う。

「・・・絵っ！？ママのカラダでっ！？？」

「そうだよお！ママにモデルになって欲しいんだ」

「ほんとにっ！？確かにマユトには絵がもっともっとうまくなって欲しいけど、モデルが・・・ま、ママ・・・！？」

「ちっとも驚くことじゃないよ・・・人物画って言って、僕が目指す画家になるためには避けては通れない道なんだよ」

説得、という感じでもなかった。

むしろストレートな愛の告白に近かった。

もちろんそれは母子愛。

だけど正直な気持ちを言えば・・・僕はママの裸を見たかったんだ。  
ここ最近僕にも性欲が芽生えて“そういう妄想”ばかりが膨らんでいく中で、ママをずっとずっと女性として見ていたのかもしれない。

もちろんヌードデッサンもしたかったけれど、それよりもそれにかこつけてママのお裸が見いという想いの方が圧倒的に強かった。

僕の口から“ヌード”の言葉が出た時は驚いていたママだけど、最後はもちろん快く承諾してくれたよ！！

「面白そうじゃないっ！！ママ、楽しみよ！！フッフッ」

輝いたママの瞳。

さあ楽しみになって来たぞ！と僕は意気込んだ。

そして・・・。

「はいっ・・・こ、これでいい？」

「いいよ。OK！すごく可愛いよ・・・そのまま描くから動かないでねっ！！」

それから数日後。

ママも僕もちゃんと心の準備を済ませ、母子でヌードデッサンに挑んだ。

場所はもちろんアトリエを兼用している僕の部屋。

小高いモデル台の上に布がひかれていて、その上にママが衣服を脱いで立っている。

**体験版はここまでです。**

**もし気に入っていただけましたら、  
続きを製品版でお楽しみいただけると幸いです。**